令和５年度学校経営計画に対する最終評価報告書

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
1　生徒指導の方針・基準に一貫性を持ち、時代の変化に対応しつつも毅然とした指導で、基本的な生活習慣の定着と規範意識の高揚を図る。	①　挨拶を含めた所作の指導を、ＳＴ・授業・休み時間、「遅刻ゼロ・鶴高挨拶運動」で指導する。	学校に関係する方々にはもちろん、生徒間の挨拶も積極的にできる生徒の割合が、 Ａ90%以上 Ｂ85%以上90%未満 Ｃ80%以上85%未満 Ｄ80%未満	91.2% 判定A	自らすすんでよく挨拶している生徒は全体で91.2%と前回調査と比較して0.8ﾎﾟｲﾝﾄ増加した。ただし、課題と思われた１年生の数値が4.5ﾎﾟｲﾝﾄ改善した反面、２年生が3.4ﾎﾟｲﾝﾄ減少している。現2年生は最上級生となっていくため、再度挨拶の意識を高めていきたい。 引き続き教職員が積極的に挨拶をしていくとともに、「遅刻ゼロ・挨拶運動」等の機会を利用し、挨拶の向上に努めていく。
	②　日常の観察の中で生徒の状況とそれに対する指導方針を共有し、全教職員が積極的に指導にあたる。	服装容儀等について積極的に声かけをしている教職員が、 Ａ95%以上 Ｂ90%以上95%未満 Ｃ85%以上90%未満 Ｄ85%未満	93.3% 判定B	服装容儀や規範意識を高めるため積極的に声かけを行っている教員は93.3%と、前期に比べて改善した。このことが服装容儀に対して、91.6%の生徒、91.2%の保護者が「良好」と回答したことにつながっていると思われる。 現在、校則の見直しに向けて、生徒の意見を聞きながら取り組んでいる中、生徒の自発性、主体性を育むために、教職員が指導した成果だと思われる。 今後も校則の見直しを進めていくことになるが、随時情報を周知し、校内指導体制の整備を図っていく。
	③　規則正しい生活習慣と時間を守ることを指導することで、遅刻の減少に努める。特に朝の始業5分前に着席するよう強く指導する。	年度内で3回以上遅刻した生徒の数が、 Ａ40人未満 Ｂ40人以上45人未満 Ｃ45人以上50人未満 Ｄ50人以上	74人 判定D	3回以上遅刻した生徒が74人とＤ評価になった。本校では遅刻3回ごとに反省文等の指導をしているが、3度以上指導（遅刻9回以上）を受けた生徒が30人いる。これらの生徒は、単なる怠学傾向だけではなく、スマートフォン依存による生活リズムの乱れ、人間関係や学習上の悩み、心的な要因による体調不良等、様々な理由や実態があるため、生徒一人一人に適した支援が必要となっている。 今後は遅刻の問題を不登校の問題と同等に扱い、「いじめ不登校問題対策委員会」等を通して情報を共有し、必要に応じてスクールカウンセラーや外部機関の協力を得ながら、即応的かつ継続的な校内指導体制の整備を図っていく。
	④　「いじめ・不登校問題対策委員会」等で生徒情報を共有し、全職員が連携して「いじめ」が根絶されるよう努力する。	「いじめがなく安心できる学校である」と感じている生徒の割合が、 Ａ90%以上 Ｂ85%以上90%未満 Ｃ80%以上85%未満 Ｄ80%未満	83.2% 判定C	アンケート調査の結果、いじめがなく安心できる学校であると感じている生徒は全体で83.2%と5ﾎﾟｲﾝﾄ以上減少している。特に3年生が5.2ﾎﾟｲﾝﾄ、1年生が6.8ﾎﾟｲﾝﾄと、大幅に悪化している。 7月以降、生徒間トラブルが複数発生したことが影響し、生徒の不安を完全に払拭することができなかったことがこの数値に表れていると思われる。 次年度に向けて、まず新学期早々に人間関係づくりの活動を取り入れることを提案する。そして、いじめアンケートだけでなく、ＩＣＴを利用した相談体制を構築し、日頃からの生徒観察、教職員間の情報共有を確実に進め、トラブルの早期発見・早期対応に努めていく。
	⑤　学校の環境美化に積極的に努め、校舎内外の環境美化も取り組むよう指導する。	校舎内外の環境美化にも取り組んでいる生徒の割合が、 Ａ90%以上 Ｂ85%以上90%未満 Ｃ80%以上85%未満 Ｄ80%未満	77.9% 判定D	アンケート調査の結果、校舎内外の環境美化にも積極的に取り組んでいると回答した生徒は全体で77.9%に留まっており、Ｄ判定となった。（学年別：3年7月91.7%→80.0%、2年7月75.8%→73.2%、1年7月72.3%→79.0%） 今後は、「鶴高クリーン作戦」を継続指導するとともに、整備委員会による昼休みの放送やポスター掲示等の啓発活動に加え、集会や各種行事、授業等、学校生活全般を通じた積極的な声掛けを展開し改善を図っていく。
学校関係者評価委員会の評価		・高校生活を大人になるための準備期間という点からみると、社会の様々な規範を身に付けることも重要であるが、目先の欲求や感情をコントロールすることも大切である。時には規範を守れなかったり失敗したりする場面もみられるが、失敗から教訓として様々なことを学び、成長の機会としてポジティブにとらえる視点も必要である。こうした経験は、生徒の主体性や他者への寛容性、ひいては自尊感情を高めることにも繋がっていくのではないか。 ・将来の自己実現に向けてキャリア形成を図っていくためには、夢や目標に対する理念やビジョン、それらの明確化、実現のための日々の行動計画、振り返りが不可欠である。メジャーリーグの大谷選手はマンダラチャートを用いて夢や目標を達成するために必要な要素を分析、管理し、夢に向かって努力してきた。目標を設定するだけでなく、自己分析や具体的な行動計画を立て実践していく等、目標の管理まで含めた系統的な指導を推し進めてほしい。 ・一方で、社会が大きく変化する中では、生徒の進路希望も多様化し、将来への目標も持てるようで持ちにくくなっている。明確な目標設定ができない生徒に対しては、外部人材を招き講演会を開催したり夢を考えるための気づきやきっかけとなる情報や経験の機会を与えたりする等、これから予想される社会変化を踏まえ、乗り越えていく力を育んでいってほしい。 ・創立８０周年記念式典や関連イベントは、参加した来校者に対して、本校生徒の日常の姿を発信する絶好の機会となったが、今後も鶴高生らしい挨拶や爽やかさ、元気のよさ等、記念事業以後も常態的に指導を推し進めてほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・授業等の教育課程の中だけでは、学びに向かう力＝主体性を、十分に発揮できない生徒も少なくないことから、部活動、教育課程外の生徒の自主的、主体的な活動を促進できる運営体制を構築していく。 ・頭髪や服装等の生徒からの見直し意見、実際の運用と齟齬のある部分の修正、合理的配慮をふまえ、校則や校内規定を整え、運用していく。 ・生徒が将来の目標や志望を持つためには、自分自身を深く理解することが重要であることから、面接指導等の工夫を通じて、生徒の興味や適性、価値観を明確にし、進路選択に向けた目的意識を育んでいく。 ・社会人や大学生による講話を充実させ、オープンキャンパスへの参加を積極的に勧めること等により進路目標の早期設定、目標管理につなげていく。 ・挨拶で相手への敬意・親愛の意を示すことで、対人関係や社会生活を円滑にするという意義の理解を、集会だけでなくあらゆる機会を通じて図っていく。挨拶以外にも元気のよさ、爽やかさ等、鶴高生としてのマナーについても積極的に指導を展開していく。		

重点目標	具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
2　生徒が安心して学べる授業づくり（授業規律の維持、授業のユニバーサルデザイン化）を推進するとともに、家庭学習時間の確保や読書量の増加を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。	①　生徒を理解するために年5回の面談週間を設ける。毎月の教育相談委員会で報告される生徒情報を、学年会で共有し、より深く把握できるようにする。担任が掴んだ生徒の進路希望を教科会でも共有し、適切に支援できる能力の向上を目指す。	個々や集団に応じた授業を行うために、担任や学年団・教育相談などと生徒情報を相互に共有している教職員の割合が、 A95%以上 B90%以上95%未満 C85%以上90%未満 D85%未満	93.3% 判定B	教育相談室を中心に、担任や学年団等と連携をとり生徒情報を共有して学習指導を展開しており、前期より向上している。4段階の最高評価の「達成されている」の割合が、7月の28.1%から40.0%と増加している。個別支援計画を持つ個々の支援や対応が必要な生徒が増えたため、個に応じた指導をしなければならない状況であるともいえ、連携・共有が図られている。 限られた人材の中での効果的な対応や、外部人材の助けを借りるなど、個々に応じた支援体制の方法を蓄積していく必要がある。
	②　1人1台端末の利用や話し合い、発表の場面などを取り入れ、生徒が主体的に学習に取り組む力を身に着ける。また、そのための学習の評価の仕方を各教科で検討する。	発表や話し合い活動など積極的に授業に参加した答えた生徒の割合が、 A90%以上 B85%以上90%未満 C80%以上85%未満 D80%未満	79.6% 判定D	全体では1学期に比べ改善されてはいるものの、1年生の数値が減少している。「総合的な探究の時間」で課題解決の手法や課題設定等、探究的な活動を行ってはいるものの、まだまだ受け身である。 今後、個々の授業だけでなく、学校全体で主体的な活動を促すための、探究的な活動スキルを向上させる指導体制を整備する必要がある。
	③　個に応じた進学指導、就職指導を充実させることにより、自尊感情を育み、希望進路の実現を果たせるよう努力させる。	年度末の進学状況において、国公立大学合格者が、 A5名以上 B3名 C1名 D0名	5名 判定A	国公立大学志望者5名のうち、5名全員が志望校に合格した。担任や進路指導課との面談をとおして、個々の志望を早期に決定させ、徹底的に志望校の入試傾向を分析し、学習プランを組み立てるとともに、小論文や面接、プレゼンテーション等の指導を半年間かけて丁寧に行う等、個別にきめ細かく対応した結果が合格につながった。また、個々の学力や課外活動、探究活動の実績等を踏まえた受験校を職員全体で検討して選び、本人に提示したことも功を奏したと考えられる。 次年度以降も、生徒一人一人が希望する進路に進めるよう、個々に応じた学習課題や学習プランの設定、小論文指導等、具体的な対策や準備等、個に応じた指導で生徒をサポートしていく指導体制の継続、拡充を図っていく。
		3月末の就職状況において、就職希望者の内定率が、 A100% B95%以上100%未満 C90%以上95%未満 D90%未満	96.0% 判定B	求人件数は、電子部品・機械部品の製造業を中心に全業種とも大変好調であった。求人が多すぎて、企業選択に苦労している者が複数いた。また、就職指導（面接練習や履歴書指導、応募前訪問・企業ガイダンスによるミスマッチの解消等）はコロナ禍前のスケジュールで準備・実施でき、順調に仕上がったうえで受験できたので、学校斡旋者は全員内定となった。年明けに進学より就職に変更し追加となった1名は縁故での就職希望で、自動車運転免許取得を優先させ、取得後に就職活動を行うということで、未定のままである。 次年度は、地元(鶴来地区周辺)企業への就業を促進するために、1年次からの企業ＰＲや企業（現場）見学等を行っていく。
	④　家庭学習調査を行い、その状況を分析し、課題の出し方を適切に工夫したり、担任が面談したりすることで家庭学習の習慣を身につけさせることにつなげる。	家庭学習の時間を確保している生徒の割合が、 A60%以上 B50%以上60%未満 C40%以上50%未満 D40%未満	51.3% 判定B	特進クラスを中心に、予習・復習や週間課題などを課し、家庭学習の時間を確保するよう指導している。今後も継続していきたい。 普通クラスでも同様に予習・復習を推奨し、毎日朝自習の時間に漢字練習や検定の勉強などを行うことで学習の習慣化と自主性の伸長を図っている。 ２年生で家庭学習時間を確保していると答えた生徒が一番多く、３年生では減少している。次年度は進路先に関する探究課題への取り組みと関連付けて学習意欲を向上させていく。
	⑤　情報科、商業科における各種検定・資格取得を推進するとともに、より上級資格取得に向け挑戦する意識付けと対策講座等、指導体制の充実を図る。	学年及び各教科が目標とする各種検定資格に対する取得率が A90%以上 B80%以上90%未満 C70%以上80%未満 D70%未満 ※合格者数／受験者数	55.5% 判定D	全体の合格率は、55.5%。全商1級取得者において、2冠1名(3年生)、1冠2名(3年生1名、2年生1名)の結果であった。取得状況については、ビジネス計算実務検定1級普通計算92.9%(13/14)ビジネス計算33.3%(2/6)、2級普通計算81.3%(13/16)ビジネス計算72.2%(13/18)、3級普通計算82.6%(19/23)、ビジネス計算80.0%(20/25)、全商ビジネス文書実務検定1級文書75.0%(3/4)速度22.2%(2/9)、2級文書83.3%(15/18)速度66.7%(14/21)、3級文書75.0%(27/36)速度85.3%(29/34)、全商情報処理検定1級0.0%(0/2)、2級ビジネス52.2%(12/23)ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ100.0%(1/1)、3級94.7%(18/19)、全商簿記実務検定では、2級25.0%(1/4)、3級0.0%(0/1)、全商商業経済検定では、ビジネス経済Ａ33.3%(1/3)、マーケティング52.9%(9/17)、ビジネス基礎100.0%(2/2)であった。 2年生については、ほぼ全員が4つの検定で3級を取得しており、2級についても約半数が取得している状況である。生徒各自の将来のキャリア形成に向けて、上位級の資格取得を目指し挑戦する姿勢や動機付け、対策講座の開催等のみならず、ビジネス全般への興味関心を高めることで、次年度の資格取に繋げていけるよう指導していく。
	⑥　学校図書室の取り組みを活性化し、積極的に読書に取り組ませる。朝学習や授業を利用して読書を取り入れ、本に触れる機会として図書館での貸し出しを促す。	図書室での年間貸出冊数が、 A1,400冊以上 B1,200冊以上1,400冊未満 C1,000冊以上1,200冊未満 D1,000冊未満	1,016冊 判定C	3月末の貸出冊数は1,016冊と昨年度の同時期より29.9%増加している。貸出の実人数でも24.1%増の582人となっている。月別推移では1学期の4～6月の貸出数が低かったが、2学期より朝学習で読書を取り入れたため、毎月100冊前後の貸出数となった。学年内訳では、1年生の貸出数が伸びている。 次年度は、年度当初の図書オリエンテーションで新入生全員に対して実際に貸出・返却を経験させたり、レファレンスを知らない生徒も少なくないため、過去のレファレンス事例を紹介する等、図書館の利用方法を理解させることで、来室のハードルを下げるとともに、部活動でも来室を促していくことで、図書館利用の向上に繋げ、貸出冊数の増加を目指していく。
学校関係者評価委員会の評価		・生徒によって得意であったり好きであったりする教科は様々である。また、好きな教科であっても単元によっては興味関心や学習意欲に差がある。探究学習は、自分で考える力や生きる力を身につけ、問題解決能力を目標としているが、教員集団が答えや結論の指示を出す等、成果ばかりに着目することが多いのではないか。 ・授業をとおして学校生活の充実感や達成感が高まっていくので、個々人が自己成長を感じ取ることのできるような学習活動に努めてほしい。 ・ボランティア活動や特別活動に限らず、教育課程内にある授業においても、地域の人的・物的資源を活用しキャリア教育やふるさと教育の指導体制を充実していくべきである。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		・総合的な探究の時間での「自己探究」、「就業体験」の単元の指導内容を見直すことで、進路研究を深化させ各自の進路意識を高めていく。 ・1人1台端末の利用については3年目が過ぎ，習熟度別や少人数での授業、個別指導等、授業改善のために端末を利用したシステムやアプリが使えるようになり活用も広がってきたが，これで満足することなく，生徒のより深い学びに向けた実践の積み重ねが今後も求められる。 ・地域と連携していく活動を広げていくことで、地域の良さを肌で感じ地元に素晴らしい生活文化があることを知ったり、地域活動や課題解決に向けて熱心に取り組む方々と接したりすることで、郷土への理解や郷土愛を培っていく。		

重点目標		具体的取組	実施状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の取組
3 教育活動の速やかな情報発信と地域社会と連携・共同した活動の推進で、地域や保護者から信頼される学校づくりに努める。	①	中学生やその保護者に対して従来のホームページに加え、新たにSNSアカウントを設置・運営し、学校行事や部活動の大会情報、日常の学校生活等をよりタイムリーに公開することで、本校への理解を深め志願者の増加をめざす。	SNSアカウント（鶴高インスタグラム）の「グッド」数が、平均で A150件以上 B130件以上150件未満 C110件以上130件未満 D110件未満	平均 140件 判定B	7月集計後に22回更新し、12月末で合計32回の情報提供を行った結果、平均140件のグッド評価を頂いた。最高値は地元「鶴来商工会青年部」様とのタイアップで行った、鶴来地区内店舗紹介の256件であった。次に高かったものは「創立80周年記念式典」で191件であった。目標値に達することはできなかったが、一定の評価を得ると同時に、実際に「鶴高いいね」と褒めて頂く声が多かったことが、今後の志願者増加や、地域との連携強化へと繋がっていくことに期待したい。 12月末のフォロワーも944件（1年で730件増加）で、SNSの拡散効果が高いことを鑑み、更なる発信に努めたい。 学校ＨＰの閲覧数は月平均で20,815件と、前年同時期より約6,000件の減少となった。多かった月は、周年事業のあった10月で44,121件と、平均値を大きく超えるなど、月によってのばらつきが見られた。直近12月が8,900件であることから、せっかく高評価を頂いた周年事業の盛り上がりを衰退させないよう、一層の閲覧数増加を目指し、こまめな更新に努めていきたい。
	②	「総合的な探究の時間」の活動を通して、生徒が興味・関心を持つ分野の課題に気づき、その問題の本質を考え、解決方法の検討等に取り組む学習活動を充実させていく。	「総合的な探究の時間」の活動において、積極的に取り組むことができた生徒・教職員の割合が、 A80%以上 B70%以上80%未満 C60%以上70%未満 D60%未満	生徒:91.2% 判定A	自らの生き方在り方を考える上で役立ったと考える生徒は、1年生は94.0%と高く、3年生は90.0%と、これに次いでいる。 1年生が高い要因として、１学期に大学見学やそれに伴う事前学習、系・科目登録をきっかけに自らの適性や進路を考える機会を持ったことがあげられる。また、就業体験に関する活動を通して学校外で学ぶ機会があったことも要因である。2年生は今後地域探究活動を発展させる予定であり、今後、より地域と連携する実感を持つようになると考える。3年生においては、年度前半に比べ、割合が減っているが、進路先決定後に自らの課題に向き合う意欲が減少したことが原因と考える。次年度以降は、進路決定者に関して進路先において活躍できるよう新たな取組み目標を持たせ、関連する探究課題を設定する。
	③	生徒・教職員・保護者が一体となり、手取川歩行や花いっぱい運動を通して、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組み、地域とのつながりを深めていく。	学校行事や課外活動において、地域のボランティアや小中学校と連携した活動に取り組むことができたと思う生徒・教職員・保護者の割合が、 A70%以上 B60%以上70%未満 C40%以上60%未満 D40%未満	生徒:48.0% 判定C 教職員:73.3% 判定A	前年同期と比較すると、活動に参加したいと感じている生徒が増加した。特に1年生が増えたものの、まだまだ低調な数値であるため、参加案内の早期の呼びかけ、活動の意識付け、部活動単位の参加による活動のきっかけづくり等、啓発や指導の工夫と改善を図っていく。 一方、教職員の意識は高く、花いっぱい運動では、生徒が地域の公共施設や病院にプランターを設置する等、積極的に地域と関わる活動を行っている。陸上部では、毎年近隣の中学生を招き実技講習会を開催している。地域探究会では中学校に、ジオパークに関する出前授業を展開している。こうした取組を他の部活動にも働きかけ、スポーツや文化的行事を通じた地域連携の取組みも充実させていきたい。
学校関係者評価委員会の評価			・コロナ禍による行動制限もなくなり地域催事も復活、実施されているので、地域に暮らす住民としては、校内にとどまらず積極的に地域住民と関わる機会を作り出してほしい。 ・インスタグラムによる学校の魅力や特色の発信、お店紹介動画の製作等の取組は、フォロワー数や外部からの反響等、成果が見えやすいため生徒たちも意欲的に取り組みやすいのではないか。「成果の見える化」で、活動上の目標が達成できていく手応えを感じられ、生徒の関心や意欲、主体性も培われていくはずである。 ・発信に関しては、日頃の学校生活の様子をうかがうことができ、今後も継続していくべきである。生徒・保護者の立場からどのような情報がほしいかという観点から、誰に何を向けているのか、楽しさが伝わっているか等をより明確にし、計画を立てて本校の魅力や特色を発信していってほしい。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			・HP、インスタグラムの更新、鶴高通信の配布先の拡大等、本校の特色・魅力の発信をより充実させていく。 ・文化部による地域イベント、施設訪問等の演奏活動では、地元NPO法人の運営にも参画する体制づくりを整え、活動の幅をより広げていく。 ・手取川歩行、ジオ遠足、ジオパークフィールドワーク、小中学校への出前授業等、ジオパークの世界認定継続に欠かせない次世代への普及啓発活動に、白山手取川ジオパーク推進協議会と連携しながら積極的に参画していく。		
4 教職員自ら、これまでの働き方を見直し、限られた時間の中で、教材研究・授業準備や生徒と向き合う時間を十分に確保できるようにする。	①	各教職員が自らの勤務時間や業務内容を的確に把握するとともに、毎月の業務の流れの中で先を見通し、区切りを意識した計画的・効率的な遂行に努める。	毎月2回設定されている定時退校日を意識し、実行することができた割合が、 A80%以上 B70%以上80%未満 C60%以上70%未満 D60%未満	63.3% 判定C	定時退校日を意識し実行できたとする職員の割合は、63.3%と前年同期比7.3ﾎﾟｲﾝﾄの減少とやや低調な数値に留まったものの、80時間超過者は延べ人数13名、実人数は8名と前年同期より延べ人数で4名、実人数で3名の減少となり、確実に減少に向かっている。月別推移では、減少した月は4月3名（同比5名減）、6月1名（1名減）、10月1名（2名減）、11月0名（1名減）で、増加した月は5月3名（1名増）、9月3名（2名増）、12月2名（2名増）となっている。また、45時間以下の職員の割合は68.4%と前年同期比9.5ﾎﾟｲﾝﾄの増加となっており、全体として堅調に改善に向かっている。 次年度以降も職員会議日における短縮日課の設定や定時退校日に特別な事情で退勤できなかった職員に対する割振日の設定を継続することで、職員の意識改革をより徹底していくとともに、各種会議・打合せ会開催の精選、運営の効率化を図る等、より堅実な遂行体制の整備に努めていく。
学校関係者評価委員会の評価			・職員への啓発については、特にベテラン教員の意識改革が鍵となるのではないか。「昔はこうであった」、「働く時間が長いほど熱心である」といった固定観念を打破していかねば効果は表れないのではないか。限られた労働時間の中で効率的に業務を進め、そこからどれだけの成果を出せるかを意識して働くことが重要である。 ・意識の啓発面以外でも、業務のＩＣＴ化による改善が効果的である。例えば、現職場では会議等のペーパレス化によって印刷時間の削減、会議後の書類管理等の手間が省け、時短に繋がっている。これらの観点から業務を見直すことで、生徒と向き合う時間を確保するとともに若手教員が成長ややりがいを感じられるような環境整備を図っていくべきである。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策			・月80時間以上超過勤務者ゼロ、月45時間以下の勤務者数の増加を実現するために、職員会議等の会議日における短縮日課の設定、各種会議・打合せ会の開催精選、会議運営の効率化を継続していく。 ・月2回の定時退校日に退勤できなかった職員に対して別日に割振日を設定しているものの浸透しておらず、確実に遂行できるシステムを構築していく。 ・各分掌に対して、業務の偏り、業務の属人化が解消されるよう、現状の業務システムの見直しを定期的に検討する機会を設定していく。 ・学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、限られた時間の中で生徒の主体性を育むとともに、効率的な部活動となるよう運営上の工夫と改善を図っていく。		